

すい せき 水石展 を み て

仙台駐在員事務所

昭和38年7月に 仙台で“水石展”なるものが開催された。“石”という語がついているが この石がはたして地質やに無縁なるものであるか はたまた有縁なるものであるかわからないが とにかく百聞は一見にしかずというわけで見学した。結論として われわれ地質やにとって“水石”なるものは あながち無縁なものではなく フィールドを歩きながら また 折にふれて ころうことを考えてみるのも なかなか楽しいことのように思われた。そこで 水石というものをあえてここに紹介し 石をみればすぐハンマーを振り上げ たきたくなる地質やが その手をおろしてはいけない石のあることを知っていただきたいと思うのである。

門外漢のご紹介であるだけに 当を得ない点が多いかもしれないし また 水石の専門家には 誠に失礼な点があるかもしれない。その点 あらかじめお許し願っておきたい。さしあたって 水石ということばの定義も人によってまちまちであり 水石が含まれる鑑賞石を次のようにきびしく定義付け 分類している人もあるがここでは 水石をきわめて広義に解釈し 鑑賞石の代表語のように取り扱って説明したい。こんな点専門家には問題になることがらであろうと思われる。

盆	石；盆に入れ 山あり 池ありといった景色を描く盆景用に使用する石
台	石；台をつけて鑑賞する石で 厳密な必要条件はとくにないが 石質の堅い宝石に近い性質のものがよい
水	石；水盤に入れ 水をかけて完全にかわききるまでの刻々の変化を眺める石
庭	石；もちろん庭において鑑賞する石であるが その石組みはむずかしい

庭石や石庭のように禅や茶道に通ずる“水石”とはどんなものか

水石は1部では山水石とも盆水石ともいわれているが一言にしていえば 飾り石 であり 鑑賞するものであって なかには10数万円 数100万円 という高価なものもあるそうである。

京都の桂離宮の庭石や竜安寺の石庭はご承知のように著名であるが 水石はこれらのミニアチュア版といってもよいかもしれない要素をたぶんにもっている。水石鑑賞は 一見そう変わりばえない石であっても わび

さびというような およそわれわれには縁遠いようなことを感じとらねばならない。したがって水石と名付けられるための資格はなかなかきびしいものである。たとえば まず大きさは片手か両手で持てる程度であり材質は堅く欠けにくいもの 色は上品で落ちつきがあってしかも一番大切なことは その姿が自然の景観などを思わせるようなものでなければならぬという。

水石のかたちのいろいろ

わが国で水石が愛好されるようになったそもその源は 遠く神代の昔からであり それ以来昭和の今日まで水石に執着してきた人の数は知れない。いかに島国の人たちのつましい趣味であったのだろう。

そうして 名石といわれるものが 古来数多く集められたが これらは大きく分けると 由来石 自然石 造形石 抽象石 色彩石の5つに分類することができ たちからはさらに次のように 詳しく分けられている。この範ちゆうに入ることが 水石の資格の1つでもあるわけである。

1. 遠山石；なだらかなすそ野を引いた遠い山を思わせる安定感のある石
2. 連山石；連峰や山脈をおもわせる石
3. 島嶼；広い海に島が点々とし 岩壁に潮が押し寄せしぶきがとんでいるような感じの石
4. 段石＝土坡石；上が平らで 段を切ったような形の石 ゆるやかに広がるすそ野や平原をあらわしたり 海岸の千疊岩にもおもわれる
5. 荒磯石；ごつごつした奇岩が荒波に洗われているような感じの石
6. 滝石；岩の上から滝が流れ落ちているのを形どった石で 石英脈などを滝の水に見立てている場合が多い
7. 雨宿り石；雨宿りして一服できそうな形の石
8. 洞門石；石にトンネル状の穴があいている洞門形の石
9. 水溜り石；小さなつぼ状のくぼみがある石 くぼみがたくさんあるものをとくに“田毎”などという
10. 茅屋石；ずっしりとしたかやぶき屋根をおもわせる石
11. 形石；人物（観音・だるまなど）・動物・舟形などをおもわせる石で 中には笑石などといってニヤリリとするようなものもある

水石はどのように鑑賞されているか そしてまたその実例は

水石をどう見るかという人によってそれぞれの見方があるが 共通している点は 1に姿 2に質 3に色である。むろん 目前の姿・色相そのものの鑑賞ばかりでなく 水石を眺めることによって 雄大な自然をおもい 造化の妙を味わうのである。においにふれはだに接し ある石からはががとしてそびえる大連山に白雲が下からわくさまを感じ またある石からは 岩壁に潮が押し寄せしぶきがとび 沖に白帆が点々としているさまを思い浮かべるなど 大自然とたわむれる境地にひたるのである。われわれしろうとの目には 文字どおりただの木石にしか映らないものが “石ごころ”のある人には このように映るし また 映らねばならないものらしい。

そこで 次に実際の例として 水石でも名石といわれる 2, 3について どのように鑑賞されるか述べてみよう。また ほかにも数葉の写真をかかげたので それぞれの好みに応じて 水石鑑賞の一端を味わっていただきたいものである。

古来名石といわれるものの産地は？

さてこの辺で われわれの専門である地質から 水石の岩質・菊紋石の成因などをはじめとして 地質学的なことがらについて説明したいところであるが 何分にも石をたたいて見ることもできないし ガラス越しの観察であって見れば われわれにはせいぜい色の判定ができるくらいのものである。したがって 次に全国の代表的な名石の産地などの一覧表を掲げるので それぞれの岩質や岩石名 また成因などを読者にあれこれと推定していただき フィールドの思い出をあらたにさせていただくのも一興と思われる。川床にごろごろしている転石だけに 時価何万円の名石も われわれのハンマーの一打ちによって一気に無価値の石となったり 川の遡行のじゃまものとしてけつとばされるなどさんざんな目にあっているのではなかろうか。

産地	石名	色	その他
北海道	神居古潭	神居古潭石	黒 黝黒 青黒
	夕張	岳金山石	黝黒 連山石が多い
	美幌	上川石	秩父石にている
	名寄	名寄石	鞍馬石にている空洞中に小石が入っている
	天塩	ポンピラ石	クリーム色
	十勝	十勝石	黒曜石のこと
岩手県	馬淵	川一戸石	黒 加茂川石にている
福島県	平市	好間川石	黒 青黒 硬質
	只見	川真黒石	黒 青黒 白紋の入ったもの
群馬県	秩父	秩父電眼石	
		三波石	

新潟県	佐渡	赤玉石	
静岡県	藤枝	藤枝石	薄青色 滝石が多い
富山県	黒部	川黒部川石	
岐阜県	根尾	谷菊紋(花)石	天然記念物 菊紋の色は白赤青白
	揖斐	川揖斐川石	黒 紫 軟質で加工
京都府	加茂	川加茂川石	黒(真黒色)
	貴船	川貴船石	黒 黒紫
	鞍馬	山鞍馬石	他に黒鞍馬 鬼鞍馬 花崗岩
	瀬田	川瀬田川石	黒 黒
和歌山県	田辺	市古谷石	黝黒 アルプスのようにギザギザしている
	熊野	川那智黒石	黒 硬質
鳥取県	佐治	川佐治川石	黒 硬質
徳島県	勝浦	川梅林石	黒地に白紋
愛媛県	あぐり	川伊予青石	
	松山市	松山古谷石	古谷川と同じ
福岡県	門司区	梅花石	灰色地に白紋
大分県		印籠石	
鹿児島県	宮田	川宮田川石	黒 硬質

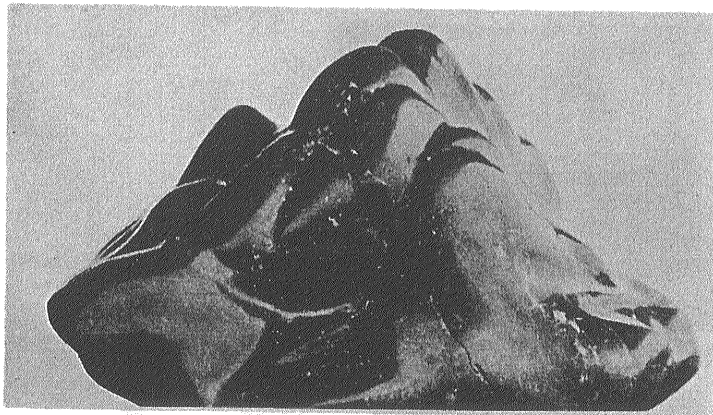
おわりに

最近 奇岩・奇勝としてクローズアップされている地方に大きな悩みがある。それは庭づくりが流行化しちょっとした庭石でも 2, 3万円の値がつくので 奇岩を引っかいて 持ち去る観光客の急増が イタシカユシということであるらしい。

地元では こんな“岩ドロボー”をさらに“観光ドロ” “鑑賞ドロ” “研究ドロ”などに細かく分けている。そして 毎夏 地質調査にグループで訪れる学生その他は 観察したあげく 大切な奇岩をハンマーでたたき割り 持参のリュックに一杯つめ込んで持ち帰るといふ。われわれ地質やが 地元の人たちには脅威的だそうである。もっとも われわれの身近でも かつて筑波山で ご神体にハンマーを振りあげ 待ちかまえていた(先方にはそのくらいよくあることらしい) 神主さんに かつ食ったことがあったということを知っているように 地質やなかまには 研究熱心のあまりの不心得者がいるかもしれない。ここではその論議はさておき われわれが“岩ドロボー”の筆頭にあげられるようなえん罪をそそぐ意味でもこの際 水石を通じて“石ごころ”を理解し 地質やが自然を愛するものであることを広言するにやぶさかでないことを 広く認識してもらおうではないか。

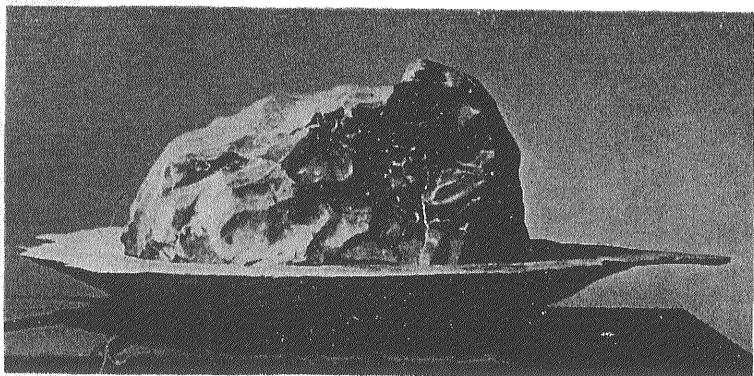
なお しばしばお許しを願っているように 筆者らは水石と初対面であるので 不じゅうぶんのご紹介に終始していることと思われる。今後許されるならば これを契機として 充実した水石のご紹介があることをおおいに期待しておきたい。

(写真は河北新報社提供)



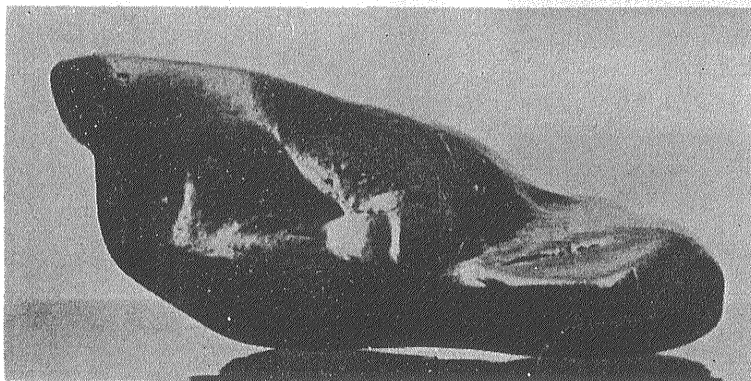
←

連山石：銘「三十六峰」20×30cm（神居古潭石）
 女性的な山なみが幾重にも空間に隆起している
 さまは奥にやわらかく 左手前にある湖とも見える
 くぼみ 点々と白く浮かぶ雲など きながら高山
 に遊ぶ思いを起こさせる
 （注）神居古潭石は水石界で“石の王者”とい
 われ 愛石家垂涎的となっている この岩石は
 青黒色の“緑色変成岩”である



→

あかだまishi
 佐渡赤玉石：銘「赤壁」20×45×35cm
 朱肉色と金色を呈する華麗な石であるが 原色で
 ないのが残念である 「赤壁」は中国の有名な古
 戦場であり ここで軍船が揚子江を血に染めても
 くずとなったところである 後世「赤壁」という
 詩も作られている 水石を眺めながら この後漢
 時代の悲劇の戦いを思い 詩人の名句を思いだす
 のである

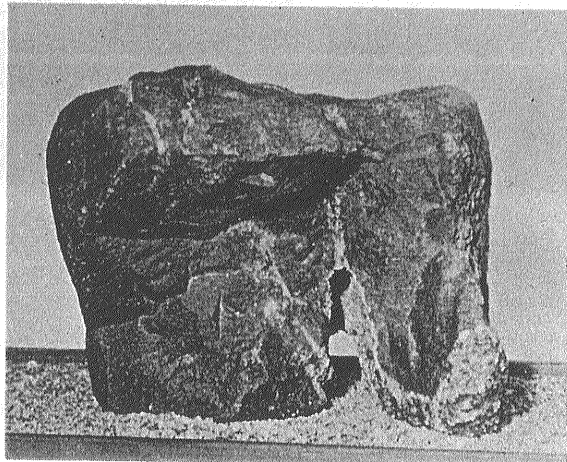


←

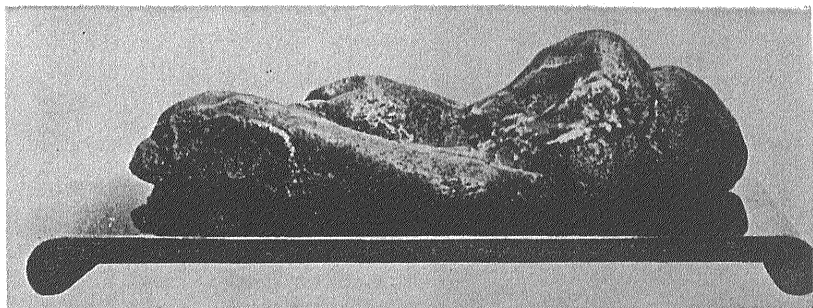
うがいishi まくろishi
 土坡石：銘「嗽石」（神居古潭石=真黒色）
 この石には2つの見方がある すなわち 1つは
 海岸の千疊岩の下には群青の流（くんじょう）れがうず巻き 背
 後は平原とも海流のさか巻きともみたててよい
 もう1つは 古語に「石に嗽して流れにまくらせ
 ず」ということばがあり これは氣むずかしくが
 んこなようすをいいあらわしているが この石の
 銘もこれに由来している つまり 野性味のなか
 に重量感があふれ “偏屈” “意志の強さ”が
 感じとれる
 （注）みなさんはどちらをおとりになるでしょう
 か その自由さも水石には重要なことのようにす



岩がけに雨をさける「雨宿り石」（岩手県一戸石）

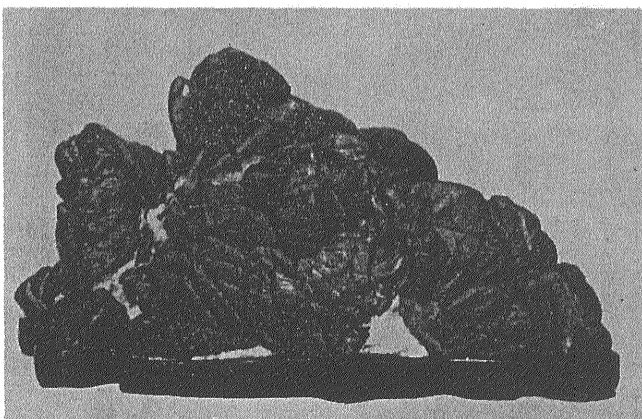


島々の姿を連想させる「洞門石」（13×15cm）
 （仙台市近郊葦石川石）

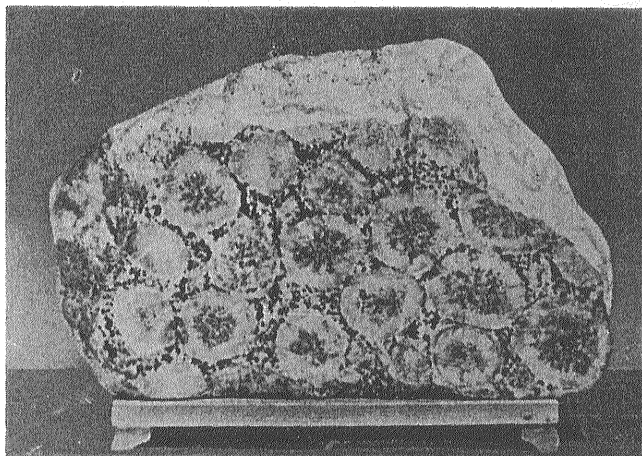
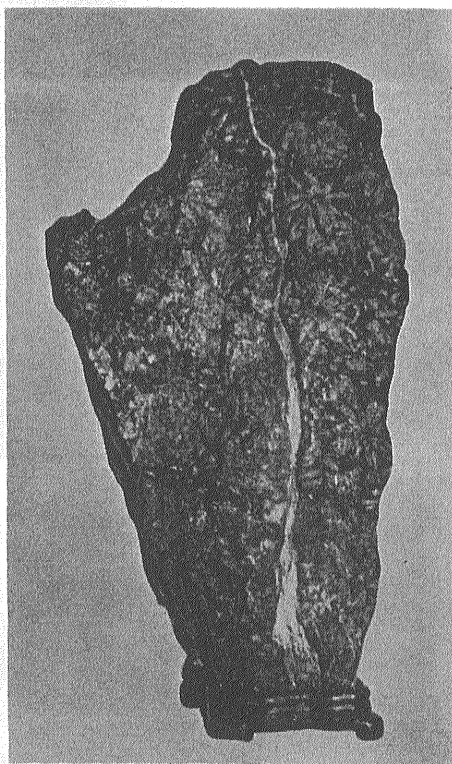


「滝石」銘「菊水」
 (40×21cm) (岐阜県根尾谷菊
 ↓ 紋石)

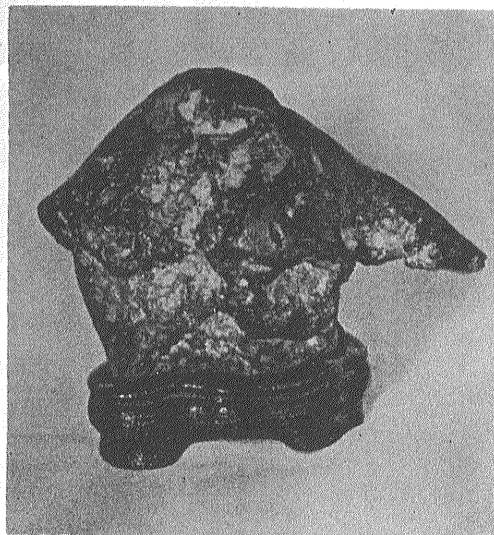
心打つ年輪の深さ 伊達家伝来の「由来石」銘「鎌倉」
 (福島県阿武隈川石または岩手県一戸石)



「荒磯石」銘「磯」(和歌山県古谷石)



「菊紋石」(宮城県白石産球状花崗岩)



→ 「茅屋石」
 (北海道神居古瀬石)